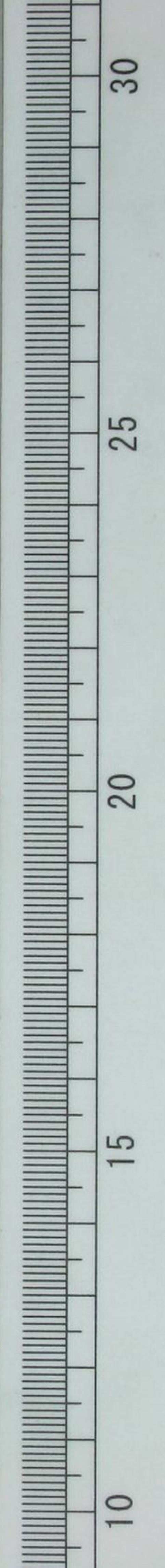


沼尻絰一郎編輯  
西南太平記

十五号

上



沼尻絰一郎編輯全二冊

# 西南太平記

東京

萬笈閣發兌

48-7804

# 王師已戰 鬪鞠躬



明治十年八月大冢錦



古書

十五編上

巨魁町田梅之進



同豊田種忠





桑名舊知事士族  
と從軍不徴募す



陸軍中尉横井逢時



西南太平記十五編卷之上

東京 沼尻絳一郎編輯

第廿九回 官軍萩の町田梅雄と討取る  
并 巡查佐藤信臣討死す

却説萩の前原黨ハ常ニ國家の時弊と論ずる  
小託して四方の同志ニ通むるより諸縣の不平  
士族等陸續來訪する中ハ熊本秋月の兩賊等  
官兵の進撃激烈と以て日るるず鎮定ニ屬せ

一乃再度萩小沸騰一山口縣下一拳と發する  
 兇徒の巨魁町田梅雄と始とり百六十餘名は  
 須佐邊の士族暴発の萌一あり五月三十一日  
 巨魁六名縛又就きその夜十時ころ三十人ほど  
 萩の警察所へ押一寄せ一ろを巡查集り防禦  
 の支度とるせ一又兇徒の三面より斬り入り烈  
 一く巡查又撃立られてこいいら一足も踏  
 止る一能をず一て敗走一刀と提げて表の方

へ飛出一が忽ち放火一其間又遁走り一が山  
 口より巡查六十名出張一て之又追撃すま  
 同日拂曉よりテルカク道のケボシ道三道より  
 進撃兇徒の堡壘を抜數多の兇徒と追撃一  
 て官軍大勝利又六月一日イツセウ谷にて  
 巨魁の一人町田梅雄と八等出仕秋良貞臣  
 が打留たり兇徒ハ散乱す人數多けを  
 直二付入り應援襲ひ来れり巡查残らず

西三河大平言

十五編上

出張す既又笹波にて開戦逆徒の百三四十  
 人にて巡查隊と戦ひ敗走し「スナイド」十  
 七挺棄て散々退き巡查の笹波驛の要所  
 口々と扼し後詰と待と逆徒より發砲せり  
 巡查勇と進んで之と戦ふ逆徒の四五十  
 人とり下りの関より官軍一中隊直進と  
 たりと現今捕縛せし兇徒百六名あり然るに  
 巨魁又亜々も三名未だ縛し就らず町田と

撃ち取りし節に敵味方とも死傷多く同三  
 日萩地の兇徒の山口縣の巡查より悉く打ち  
 平らげ残り捕縛せしりも鹿兒島の逆  
 徒の熊本城下と去りて入吉の嶮に據り銳氣  
 と養ひ金穀と募り堡壘と要所又築きて  
 専ら持久の策と立しも官兵の嶮と攀ちて  
 勇進し國見山より鏡山まで四里間哨兵線  
 と張り神の瀬口も又三國山大槻小いト添山

等と抜て進撃せしかた兇徒の股瀬と焼き  
 神の瀬と捨て走るよ乗ト佐敷球麻川  
 八代奈須以下諸道の官軍の追々に戦線と  
 伸張し遂に六月一日人吉の根拠を陥入を  
 たりと聞けり然もとも逆焰此の處に蕩尽  
 たるよ何れねば敢て逆兵と討んとせしよも  
 あらず彼の熊本城下と去り一日と同トく  
 未と其地よ有るが如くして疾脱去し再び日

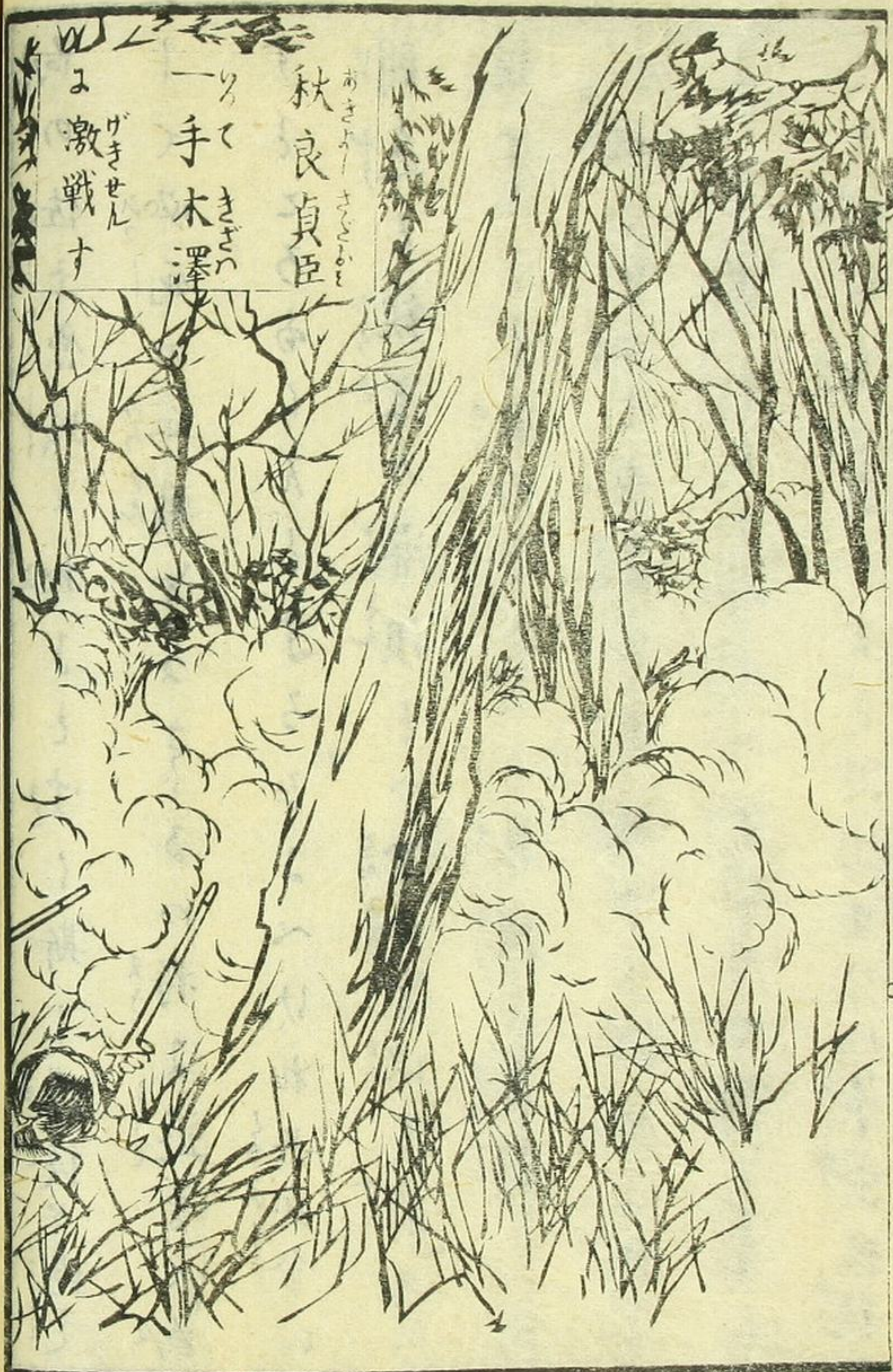
向の佐土原城と拠るとすく斯く逆徒が遁走  
 して必死の血戦とるさざるの将を退きて為  
 すところあらんとするまるべけれ共兵食の  
 關乏と銃器の廢損とい今日を以て前日に  
 復せんこと能はざるべし亦既よ虚勢と偽  
 仁政とを以て愚民と壓服するの地よ離る  
 る事再三あり持久の策をたて銳と養ふ  
 と何ぞ及ばんやまると同二日ハ八等出仕秋





西遊大平記

十五編上



西遊大平記

十五編上

秋良貞臣  
一手木澤  
み激戦す

良貞臣の巡查隊を盡力して木澤を乗つ取り  
カセガ坂へ哨兵を出張し巡查一同進撃の後  
萩を廻復せしむ

暴徒 巨魁 町田梅雄。豊田種忠。鮎川義助。吉  
寄亀之助。大隊長 大和田道輔。隊長 井上  
治助。堀五郎。吉村乙熊。秋梅之助。會計方  
田中周輔。山本壽左衛門。兵糧方 岡本吾作。  
福光九十郎。大和来造。田中安助。神崎竹

之助。松谷忠吉。金子與總。石丸彌市。諸  
周旋方 秋元道蔵。其他同類 拘引

此の騒動の節は諸方とも放火さき情るく非  
道は家を焼れたる明木村の瀧口吉右工門の品  
を奪はれ切殺され又畑玄仲といふ医者ハ一時  
暴徒は與せんといふ。昨今全く静定する  
たりけり

熊本に居る岩男俊貞より東京に寄留し

て居る弟三郎又贈り書の寫

二月十六日及四月十九日の状同廿九日一

同相達一前文畧陳仕候

去る二月十四日城兵打て出で新屋敷を放

火の節。貞の家番をりて有りしを縛

て城に引今又帰らず但疑ひるき者へ

同日引れたるも大概放免するりし

ども同人の少しく香ひあると有りて隙

取るるべし露の初發より加はりしよ

一尤も未だ討死のせぬより一休の連判帳

へは百人一少隊と見做し二十番小隊まで

熊本縣人加入のよりし付人名簿を聞候

を定めて驚くべく名前も可有之と存ト

候我が家の家財の大概出し得りその

尤も重んずる物の行先々へ持運び其の

軽きもの野屋敷及び沼山津等へ残し

置けり夫それでまら運賃うんちん及び人夫ひとぶの貴とうきと  
平日へいじつは五倍ごばい或あるは十倍じゅうばいの事こともありて財ざいと  
費つひやすは五十餘圓ごじゅうよ十九日じゅうきゅうにちより同廿二日どうにじふにちまで  
沼山津ぬまやまに在ありて雖なほも自他みづかの人数にんず三十余さんじゅうよ  
名なに及および朝暮あすむ甚おそろし困難くわんなんに耐たえず且かつ此この  
戦争せんそう遂ついには建軍邊けんぐんへんへ本陣ほんじんと坐すわり沼山津ぬまやま  
邊へんへ輜重しじゆうを置おくまゝるべしと是こゝに候まをり付止つきとま  
ると僅わずかりは兩三日りゅうさんじつより居まりて下陣村しもぢんむらの躰や

平太へいが家いえは移うつす居とると殆たいてんど五十日ごじふにちふり  
て同村下田健助どうむらしたけんすけが家いえは移うつす是これより先南さきなん  
方かたより進すすむ黒田山田くろやまやまだの官軍進撃くわんぐんしんげき甚おそろし速すみに  
して其先鋒そのせんぽうの既すでに御船ごふねに迫せまり海うみをハ橋はし掛か  
と破やぶり直ただに進すすんで川尻かわしりを放火はうかし勢いきの熾さかし  
んるるを以もつて西郷さいきやうの二本木にほんぎの本陣ほんじんと矢部やべ  
は引揚ひきあげ此日このひ薩軍さつぐんの手負ておひ悉たく矢部やべと持も  
して移うつす而しかも夙あるきき北きたの鳥とりの栖す竹たけを

梶尾をよより西山と連り西南の野出高橋二  
丁川尻上島御船と配布して要所高部の  
戌兵凡そ廿四ヶ所と云ふ而して六十余日  
の戦ひ又惣兵困弊を極め西郷が指揮届  
きり又連り進んで勝の算るきを以て一旦  
兵を纏め一軍議み及ぶべく哉のところに彼  
手負人が軽と帰ると共と壯健の兵士も  
惣引の勢と相見え候間幸と存居候

ところ豈圖らんや一夜の中ふ再び繰り戻し  
北の新南部邊より保田窪建軍下江津上  
島御船まで一帯と備へて立最斯の決戦致  
すべく摸様と付敵地の腹心と潜んで晝夜安  
き際るく見聞と忍び難き事のと有るは  
忍びたるの生来の痛心と有之候且社中諸  
子思ひしと離散して唯敵地一方とあるは  
矢島と僕とのと其源助の逆徒の為と兩度



鬼頭字吉  
戦地の景  
況と譚る



木山の本堂迄引れ初度の格別の事も有り  
 リーグ後度又の迎刃首と相違有之間敷  
 と掛念致し候へども天幸を得て蘇生し  
 警を解きたる儘其足にて遠く走まり  
 残る者の儘又僕兄弟にて既刺客の人名  
 まで承及候へども幸小覗き窺ふ者も  
 りき實に嶮しき事候

茲又東京深川の東町に住む飯塚新平が五六

年前又兼種類を渡世して居る頃同町の  
 妙壽寺と云ふ彼の寺の弟子で長学が大病  
 て既又医師も見放す位のを新平が手齋の  
 薬を與へ本獲しと云ふ其後に至極懇意とな  
 つて毎日のやうに遊び杯を來り今の世に出家  
 して衆生を濟度為やうより官途に付て人民  
 を保護するが遙に増し自から解悟しと物や  
 ら長覚の歸俗して鬼頭宇吉と改名し志

願がらんの通り一昨年さくねんから第六方面だいろくほうめん一署いしよの巡查くわんさする  
 り頻しきり又勉強べんきやうして勤つとめて居ゐるうち這回このか鹿兒島くわいじま  
 の事件じけん又付去つきさる二月中ちゅうぐん熊本くまもとへ出張しゅちやうの群ぐん又カ  
 かり屢まづ苦戦くせん又及およんがり一いちが既すでに木の葉このはの一戦せん  
 の時討死ときうちどいせしとの風聞ふうぶんが東京とうきやうへ聞きえ彼飯塚あいついづか  
 新平しんぺいハ駭おどろいて尚東西なほとうざいと問合とませる又三月さんげつ未頃まいごう  
 又戦死疑せんしうぎひりとの事故じこ可憐あはれきり又未いまど廿  
 四よや五ご下皇國こくごの為ためと言いふが修羅しゆらの街まちの露つゆ

と消きえ跡あと吊たふ者ものも外ぐわいに又あるまど兼かねて懇意こんい  
 の譯わけもあまは心こころむりの回向えきやうと曩さきに巡查くわんさ又  
 ろり又時自筆ときじひつの宿所しゆくじよ姓名書せいめいがきを貫ぬつて置おけ  
 と思おもひ出いし其書付そのききを佛壇ぶつだんへ張はりて香花かうがを手向てむか  
 け供物くわつものを備そなへ或ハ悼おぼえ又袖そでを濡ぬすもあ  
 り兎角とくかくして五月十七日ごがつしちにち不圖ふと門口かどぐちへ宇吉うきちが来きと  
 由よし家内けいだい一同吃驚いつくしやうしてそりやこそ宇吉うきちの幽霊ゆうれいが  
 迷まよつて来きたりと女共にんならハ覺おぼえず奥おくへ逃にげ込んで換か



援をする者もあいのを宇吉の却つて怪む  
 体ゆゑ怖々なぐら新平の渠が様子をつくり  
 見るに常と変つと事もなけれは儲の無事と  
 て歸られたりと嬉しき終て手を取て宇吉と  
 奥の一間へ誘ひ實ハ斯々云々の噂を頻り  
 又聞たゆゑ世と亡人とのを思ひ佛壇まで明け  
 て見せれば此方も驚き今よ始めぬ御深切な  
 禮の辞は盡されますと僕討死の風聞あるの

無りろくず我が隊兵木の葉と本営として戦ひ  
 及ぶ時暴徒の地へ探偵と命ぜられ下賤の  
 者の姿は打扮渠等が動静と探らんとして過  
 つて捕られ敵の間者であるべいと厳しく拷問  
 されと上既と殺さるべりと種々言解て刃  
 と遁れ辛く歸陣と後と頓て味方の前  
 導として進撃と及ぶ時右の股を打抜と姑  
 く長崎の病院に入り稍快方赴りよゑ又戦



佐藤信臣強徒と戦  
ついで段山又討死す

地へ願ふたもと御採用よりさうざうして蒸氣  
船に乗り組せられ空しく帰京致したりと物  
語りける

又第一方面三分署の二等巡査佐藤信臣の履  
歴を委しく尋ねるゝ舊宇都宮藩士ありて高  
百石余を領し物頭を勤たる佐藤権平の弟あり  
傳云信臣の幼稚の頃より江戸に住居釵術  
の千葉周作の門に入りて数年の間勉強

柔術の礎又右工門に學んで何れも熟練を  
したるゝ素より大兵肥満にして力飽まで  
強かりし故次男も召出されて十五人  
扶持を賜ひりぬ然るを明治戊辰の年徳川  
家の臣脱走して宇都宮城を襲ふと聞よ  
り此時信臣二十五歳這ハ一大事と思ふ  
よぞ乍ち江戸を發足して夜と日と繼で  
駈着し既又接戦の最中るるも須更

も猶豫まべくもあらば準備の槍をひら  
 めかして矢庭に賊中へ躍入り多勢の中  
 に囲まれざる敵を選まず突倒すうち  
 早晚槍も切り折られ數ヶ所の疵を負ひ  
 たれど些しも屈する氣色もみく抜たる  
 太刀もさくらしるるまで死力を盡して戦ひ  
 一由る賊と八方に斬散らせしは尚一人の  
 敵ありて組んと進むは此方の臆せず太刀

を抜ぎ棄組合ふて上を下へと捻合ふ折  
 から兄権平を始として自餘の躬方も駈  
 付一かば終に敵を斬り倒し弟を助けて  
 城中へ連歸りしが面部をくりも十ハケ所  
 の疵を受けたる事なれば逆も存命すべ  
 くも見えぬ殊に敵に迫られて城中の  
 火のかりりから叶ひがたしと思ふを  
 弟よその昔言聞せて稍介錯を倣んとす

りを信臣はうち笑ひて是の薄痴と  
 て争り命を殞すべき是非療養を加へ  
 んと言ふを殺すも惘然と城外へ連れ出  
 して手厚く治療を放せし幾程もよく傷  
 も癒て既又會津追討の中村半次郎  
 又隨從して奥州栗山口に進む爰でも數  
 ケ所の手を負へど僥倖ありて死小至ら  
 ず後明治八年則ち巡查と拜命し程な

西南報  
 二等又昇進して東京木挽町一丁目に住  
 そ子も三人まで設けしが兎角して去年十月  
 熊本縣下を於て神風連が暴拳を及びたる  
 時に出張の群を加り譽れありしとや  
 今回又二月の初旬より肥後へ出張して熊本  
 小籠城一種々の困苦をうけたる上三月十三日  
 の朝に至り官軍段山へ進撃し逆徒の炮壘を  
 攻落し尚も相圖の喇叭と俱に頻りに進んで

激戦げきせん するるとき敵てきのな名なふあの薩さつの強勇ぢやうゆう然されど  
 も屈くつせぬ信臣のぶおみが身み又また數十ヶ所すうじゅうけしよの傷きずを負おみるが  
 ら群ぐんがる中ちゆう又また切きて入いり終はり討死うちどしと遂とげたるハ  
 適あつれ稀まれなる英勇えいゆうありけり

西南太平洋記十五編卷之上 終

010190507780

